

伝統に生きる

—あらかわの工芸技術—



扇子

ふか つ こう ぞう
深 津 鉦 三
(号 雲錦堂)

(平成2年度作品)
16mm 映画・ビデオ
カラー・17分

プロフィール

住所 荒川区荒川4-31-8

大正4年(1915)、東京生まれ。

昭和63年度 荒川区指定無形文化財保持者に認定される。

江戸末期、祖父井上利兵衛氏が日本橋に扇子店を開き、父弥一郎氏が二代目を継ぐ。長兄、次兄(井上福次郎氏-57年に足立区へ転居)とともに、扇子づくり、技術を学ぶ。やがて、母方の養子となり、深津姓を名のる。

仕舞扇(舞扇)、中啓(能楽用)、持扇、干支扇、渋扇、豆扇、祝扇など、あらゆる種類の扇子を注文によりこしらえている。皇室関係、役者関係の扇子も手がけている。

「竹の骨が悪いと、よい扇子はできません。紙と竹骨と、よいパートナーを見つけることが大切です。扇子は、美しい直線と曲線とを同時にとり入れた古代からの美の完成品です」と語る深津さん。『直線と曲線』とが作りだす美を、日夜、追い求めている。

企画 東京都荒川区教育委員会・製作 毎日映画社

用具・工具

和紙、真竹、糊、折型、キリ出し、カナメバシ、差し竹、拍子木、ハクバシ、クイキリ、シゴキ、せっこみばん、断ち包丁、作業台など。



工程——仕舞扇と中啓の場合——

- (1) 口あけ。五枚合わせの和紙(扇状に切られている地紙)の扇面の下の方を「ひら口あけ」で竹の骨を通すところをあけていく。
- (2) 濡れた布で扇面をしめらせ、上に板をのせる。(夏は2～3分、冬は20～30分、このしめし加減が、次は20～30分、このしめし加減が、次の「折り」の作業に影響をあたえる。
- (3) 折り。地紙を一枚ずつ「折型」の間に当てて折っていく。
- (4) 折りが済むと「ハタ」を切り、カシで作った拍子木でケヤキのあて台の上の地紙を叩いていく。
- (5) 「せっこみ」盤に地紙をはさみ、締める。
- (6) 「差し竹」を「口あけ」か所に差ししていく。(この作業は「中ざし」といって中ざしが曲がると中骨も曲がってしまうので、差し竹を真っすぐ、真ん中に差ししていく。)
- (7) 紙断ち包丁で折地の上下を切る。
- (8) 水でといた「ひめ糊」を付ける。
- (9) 折地の先に金箔を押す。
- (10) 中骨を入れる穴を口で吹いてあける。
- (11) 「先きつみ」台で包丁を使って、親骨の先を揃える。
- (12) 親骨に糊を付けて、地紙と貼り合わせる。(中啓は15間中、8間に当たるところの上の方に糊を付ける)
- (13) 仕上げ。



利用される方は……………☎**3891-4349**

この記録〈16ミリ映画〉、〈ビデオテープ〉は、荒川区荒川図書館で貸し出しています。貸し出し期間は、1回5日間です。お気軽にご利用ください。

※16ミリ映画は、団体登録と16ミリ映写機講習修了者が操作することが必要です。